

2021年12月26日 説教「自ら傷つく弱さ」

高橋克樹牧師

イザヤ書49章7〜13節、マタイ2章1〜12節

主イエスのご降誕を祝うたびに、私は主イエスがご降誕前に母マリアのお腹の中で何を感じ取っていたのかということを思います。最近に研究によれば、赤ちゃんはお母さんのお腹の中にいるとき、暗い部屋の中にいるのと同じ状態にあるそうです。ところが、そのくらい部屋は赤ん坊にとって安全な場所にいるという認識をもたらしているそうです。そして、赤ん坊は、来るべきこの世への誕生に備えて外観を観察しているといえます。お母さんのお腹の一点に光を当てると、赤ちゃんは必ずその光の方に顔を向けるそうです。また、お母さんの周囲の人々が明るく話しかけると、赤ちゃんは敏感に反応して活発に動きますが、「赤ん坊ができるとは思わなかった」とか「生まれてこない方がいいのに」などと、拒絶されたり暗い言葉を投げかけられると、ジーツと縮こまって、身を硬くして動かないそうです。このように赤ちゃんは母の胎内でこの世の評価や価値観に鋭く反応しながら、この世に生まれてくるに際して、この世を母の胎内から少しずつ認識しているわけです。そして、「両親をはじめ生まれ落ちる環境が自分に対して否定的ならば、その赤ちゃんはこの世を1安全な世界とは見ないのです。いま、日本の児童相談所は親から虐待された児童であふれています。周囲の者の中には「こんな両親のもとには生まれてこなかった方がよかった」というような言葉が、つい口に出るそうです。けれども、そういう言葉を聞いた子どもや赤ちゃんは自分の存在をどのようを受け止めて、この世で生きていくことになるのでしょうか。

私のところの長男はお腹にいるときに「クーちゃん」と呼びかけていました。誕生してから少したって、しゃべれるようになってから『お腹にいたとき、なんてよばれていた?』と聞いたら、「クーちゃん」と答えたので、びっくりしたことがありました。そういう経験もあって、イエスはマリアの胎内にいた時、この世をどのように観察していたのかと考えてしまうのです。

赤ちゃんが出産した際に逆さにすると必ず大きな声で泣き叫びますが、その泣き声は「この世に生まれてきてうれしい!」という叫び声だと私は勝手に思い込んでいましたが、実際にはまったく反対で、「助けてくれ!」と叫んでいるのだということです。つまり、今まで胎内でへその緒を通して空気をもらい栄養をもらって安心して生きてきたわけですが、それがこの世に生まれ落ちた途端

命綱が断ち切られてしまったために「助けてくれ！」と全身で叫んでいるというのです。

主イエスのご降誕もこれに似ているのではないかと思わされます。安心していられる神の許から命綱を断ち切られてこの世へ来られた。しかも自分が選んだわけではない両親のもとに遣わされた。クリスマスするとき、私たちは神の摂理によって、とんでもない事態に遭遇させられたマリアとヨセフにばかり目をむけがちですが、当の本人のイエスさまはマリアの胎内にいるときからこの世が不安と恐れに支配された世界であることを知っていたと思います。マタイ福音書2章を読むと、決してイエスが周囲の祝福を受けて生まれてきたわけではないことがわかります。まず、ヘロデ王は自分の立場を脅かす救い主の誕生を知って、殺そうとします。実際に、イエスの誕生の陰で、ベツレヘムの周囲にいた2歳以下の子どもたちが大量に殺されています。救い主であるイエスが誕生したために、何の罪もない子どもたちが大勢殺されたという事実には、戦慄を覚えます。この意味で、イエスは誕生した時から、この世の闇を背負わされてたことがわかります。

成人したイエスが、自分が誕生した際に、大勢の子どもたちが殺されたことを知らないはずはないと思います。その話はベツレヘムでは誰もが知っている悲しい出来事です。それが自分の誕生とどのように関係しているのか、イエスが考えないわけにはいかなかったことでしょう。だって、自分は助かっているのですから。成長していく過程で、イエスが殺された子どもたちの命も分も、自分は生きていかなくはならないという思いを抱いたことが公生涯を始めるきっかけになっていたのではないのかと思うのです。自分はどのようにしたら、神の御旨を知ることができるのか、どのように神に対する責任性を果たしていくべきなのか。そういうことを考えないわけにはいかなかったと思います。ただ単に神さまに対する信仰心を抱くユダヤ人として成長下ではなく、自分なげべツレヘムで生まれた時に助かって、他の多くの子どもたちは殺されたのかということについて、神との関係で真剣に考えることがあったに違いないのです。想像をたくましくしてみると、イエスは育っていく中で、『あれが唯一助かったイエスという子どもよ。運がいいのか悪いのか、とにかく変わった星のもとに生まれた子だね』と陰口のように言われながら育ったに違いないのです。

そういう生育環境が、後に神の御旨を受け止める自意識を抱くことにつながったと思います。自分だけが生き残るといっても残酷な人生だと思えます。自分の年代の友だちがいらないのですか

ら、イエスは自分が馬小屋で生まれたことが殺されることから逃れられた原因だと単純に考えることはできなかったでしょう。占星術の学者たちが、自分が誕生した時に来たという話も、母マリアや父ヨセフから聞いていたでしょうが、学者たちはそもそも旧約聖書におけるメシア信仰とは縁もゆかりもない人たちです。しかも、異邦人である占星術の学者たちがメシアの誕生を告げるために、自分が生まれた馬小屋に来たという話は、ユダヤ人としての教育を受けて育ってきたイエスにとっては摩訶不思議な話と映った事でしょう。占星術の学者たちがユダヤ人にとって、その到来を待ち望んでいるメシアに会いに来たという話は、ユダヤ人として教育を受けてきたイエスの常識から考えてみると、そのようなことがあり得るとは到底考えられない話でしょう。もしかしたら、両親はとんでもない造り話をしているのではないかと疑ったこともあったことでしょう。

占星術の学者たちが星の導きを受け入れて、幼な子イエスを拝するために長い旅をしてきた話は、成人したイエスにとっては遠い過去のおとぎ話のようなものです。仮に、自分がメシアだと言うのなら、どうして神は自分のような大工の息子を選んだのか。何よりも神がメシアを赤ん坊の姿でこの世に遣わしたという話がほんとうだとして、当時のヘロデ王によって抹殺される危険性の只中³に赤ん坊を遣わしたということは、メシアは弱く傷つく可能性の高い赤ん坊だと考えることができなのか。成人したイエスにとって、イスラエルに約束されているメシアはイスラエルの民がローマ帝国の支配の中で苦悩している人々を助けることができる力を持った人物であるはずだと考えていたはずで、それが、自分のような大工の息子がメシアであるはずもない。腕力が強いわけでもない。政治的なリーダーシップを發揮する柄でもない。そういう思いを抱いていたのではないかと想像するのですが、そういうことを想像してみるのですが、あながち間違っているとは思いません。占星術の学者たちが訪ねてきた時の話を聞いても、それは自分が生まれたばかりの赤ん坊の時の話ですし、仮に学者たちが訪ねてきた話がほんとうのことだとして、神はメシアをもっとも弱い存在である赤ん坊の姿でこの世に遣わしたのならば、神は非力で弱い赤ん坊をこの世に派遣することで何を示そうとされたのか。それは、この世の強さや確実さという力の幻想を打ち砕くためだったのか。イエスは自分自身にイスラエルの民を救うような力がないことは分かっていましたから、この赤ん坊という最も弱い存在として神がメシアをこの世に遣わしたのならば、それはこの世に敵とし

てある力に対する幻想を打ち砕くためではなかったのか。そういう考えに思い至ったのではないか。イエス誕生の現場はベツレヘムで最も惨めな馬小屋でした。その誕生の現場に表された弱さに、この世の力に対抗する力はありません。自ら傷つくことをいとわない姿勢しか、ローマ帝国の力の支配に向き合うものではありません。イエスは神の御旨を問いながら、十字架への道を自ら進んで行かれました。そのような選択をした背景には、自分が誕生した時、他の多くの子どもたちが殺された事実が横たわっていること。自分が生まれた場所が馬小屋ということで殺されずに済んだことに示されている神の御旨。十字架への道を進まれるイエスが、自ら傷つく最後を選び取っていく中で、小さい時から言われ続けてきた「あの虐殺事件で生き残った子」という嘲りにも似た扱いを受けてきたことの悲しみ。自分自身が弱さの中で誕生したことの意味が、十字架への道行きの中で、焦点が結ばれていったのではないかと想像して見るのです。イエスは、十字架という弱さの極みの中で自分に示されたメシアとしての死に方を選び取って行ったのではないかと思わされるのです。

クリスマスするとき、弱さから弱さへと歩まれた主イエスが、自ら傷つくことをいとわないことで、私たち人間のすべてを受け入れてくださっていることを覚えるものです。そこには「弱さの中に働く神の力」が示されています。かつて、パウロは「(イエスの)力は弱いところに完全にあらわれ」と言いました。神の真実なる力は弱さの中にこそ十分に働くという真理です。神は世界をつかさどっているけれども、それは「自分の強さによって全てを意のままにしているわけではありません。この世的な価値でみるならば神は決して「全能」ではなく、まさに「無力」なのです。人間を含めてこの世では強いものに従うことにはある意味で必然のことですが、それしか選択できないという意味では、そこに自由の余地はありません。逆に、弱いものに従う時、弱いものを選ぶ生き方には「自由」が生まれます。この意味で神は「自身を無力化して力の行使を放棄することによって人間に完全な自由を与え、ご自身が弱く無力であるがゆえに逆説的に神の「全能」を力強く私たち人間に示しているのではないか。その究極的な姿が十字架上に釘付けにされたイエス・キリストなのです。自らの力に頼って生きる生き方は外見では「強い」生き方のように見えます。しかし、そのような生き方ではなく、自らの苦難やこの世の苦難を担い続ける「弱い」生き方のなかにこそ本当の力強さと救いが存在しているのです。